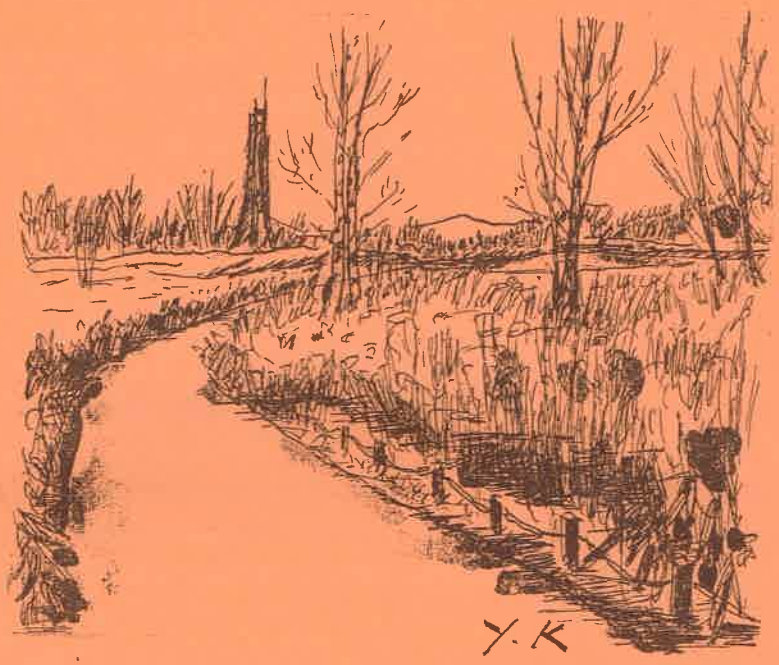
エゾマツ



冬期号　　NO　71

2005・1・27

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目　　次

冬期号　ＮＯ７１

Ⅰ　巻頭言　紀元２００５年の初春を迎えて ― 会長　川端功治　1

Ⅱ　観察会の報告 ―― 特集（1）

1　平山登山研修会 …… 小林英世　3
2　海を渡って来たベンチ …… 内山恭子　4
3　「秋のありがとう観察会」に参加して　岩見沢市　菊池富雄　5
4　西岡水源地あれこれ …… 札幌市　植松　茂　6
5　小学生との観察会
……学校教育へのボランテイア活動 …… 事務局　7
6　冬の円山登山観察会 …… 田村允郁　9

Ⅲ　道内外の自然観察・紀行 ―― 特集（2）

1　「知床半島」なるか世界遺産 …… 伊藤秀平　１０
2　偽高山帯形成の山「月山」 …… 成田伸一　１２
3　ブナの原生林が息づく白神山地を訪ねて …… 佐藤清一　１７

Ⅳ　連載シリーズ

1　オオワシ …… 荻野裕子　１９
2　５０嵐の　恣意的ブックレビュー　その② ……五十嵐一夫２１

Ⅴ　ボラレン情報　２３

巻頭言

紀元２００５年の初春を迎えて

会　長　　川　端　功　治

会友諸兄にはご家族お揃いで輝かしいお正月を迎えられ、楽しくお過ごしの事と拝察しておりますが、誠に慶賀な事とお喜びを申し上げる次第です。
ことしはどんな年になるのかそれぞれ期待の胸が膨らむところですが、その足元からこみあげてくるのは、前年の全国に発生した天然の大災害です。

思い出すだけでも身震いする地震、風水害が日本列島に荒れ狂い、逃げ惑う人々の数知れず、貴重な生命や財産を奪われたのは、痛恨の極みでありますがこの世に神や仏も無いのかと恨んでも甲斐の無いことでもあり、ここは皆で手を組んでじーっと耐え抜き、明日からそれぞれが何をなすべきか、を考えなければならないと思われます。このことは何千、何万年も繰り返えされて来た事で、今一度元気を取戻し、災害を修復して、再起しなければなりません

台風被害発生の速報の中にシンボル、北大のポプラ並木の倒壊報道が市民に強いショックを与えました。
早速現場を訪れてみました。折り重なったポプラの巨木の山を見てただ唖然とするばかりでした。しかしながらこの場所は２０年前に北大の保安管理の方達と予測したとうりの風景なのです。

当時を思い起こしみました。この人たちは何年か毎に発生する巨木の倒壊する凄まじい惨状を目撃しているので、其処に遊歩する観光客が居たらどうなるか。

その恐怖とその緊迫度を訴えたが大型車両クレーン車の吊るし切り等の諸経費の嵩みから予算化が困難で、審議は渋滞してしまった。
ところが見かねた業界人から名人伐木手の応援稼働奉仕の提供があり工事はスタートした。名人の慎重な打診と作業の結果、危険な胴腐れ空洞木でも難

無く指定方向に倒された。私は指名され現場責任者となっていたが、その目でみたこの伐木手の腕前は素晴らしい。思わず拍手をしたが見物人からは拍手どころか罵声がとんだ。生きている木を伐るのは殺し屋だ。「人コロシ！」未だ青い葉パが着いていると叫ぶ女声。そこで私は「危険木を取り除き若木を植えて末永く市民に愛される並木にするのてご理解下さい」と叫んだが聞くどころか、逆に教授と名乗る男が進み出て「私の存命中は私と共に生きてきたポプラは伐らないでください」と言つて深々と頭をさげた。

ポプラに自然死を与えよ。ポプラが倒伏しして怪我をすれば、その人の自己責任である。市民の会とかポプラを守るの会等と、社会ルールのはずれた論議で時間つぶしの暇は無い。大学側も学内の思想統一を図り、大学を取り巻く諸団体市民団体との公聴会を開催して民意を事前に問うべきだった。

私の立場はまとわりつく人達に作業により怪我をさせてはならない。
私は決断をした。作業中止、作業員一斉引き揚げを実行。心境甚だ穏やかならざるものがあった。保安管理者は直ちにポプラ並木用地内一切立入禁止の表示板を掲げた。

２０年前決断をした場所に今立って感無量。あの時伐採整理をしておれば２０年生の若木の並木の整列が今鑑賞出来たことになります。
丹保学長がこの場所で累々とし山成すポプラを眺めて慨嘆して「これでポプラのお務めは終わりました」との発言が伝わり、これがきっかけとなりポプラ並木の再興論が興り、募金活動へ発展し、２６００万円を越え、直ちに現地に投入され有効に活用されているそうです。

会員各位の地方でも私の体験に似たようなトラブルがあるかもしりませんが長年のキャリアを生かして災害復旧にご活躍あらんことを期待しております。

平山宿泊研修会　研修部　小林英世

７月２４日から２５日にかけ丸瀬布と白滝に於いて今年度第１回目の宿泊研修を行いました。白滝の小栗さんのご好意で小栗さん所有の山小屋を借りての宿泊研修でした。２４日丸瀬布の昆虫生態館集合という事で、当日１３名の会員の参加がありました。北見地方の水銀柱もぐんぐん上がり、３４℃ぐらいあったかと思います。昆虫館前の高山植物の花壇を見ながらの観察会、何かあればすぐ観察が始まる研究熱心さには感心するものがありました。自分もその一人でしたが、全員揃うのを待ち昆虫生態館に入館。いろいろなカブトムシやクワガタ、オオゴマダラなどの蝶、蟻、ミツバチなどの生態を見たりしました。なかでも、蝶の産卵をまじかで見る事ができたのは感動ものでした。その後、白滝駅に向かい、地元のお祭りの丸太切りにボラレンの精鋭４人飛び入り参加、惜しくも５位の成績とまりました。なれない丸太切りに悪戦苦闘、でも、大いに盛り上がりました。

小栗さんの山小屋に着き、全員で宴会の準備、小栗さんの奥さんの下準備もあり、豪華な夕食となりました。その後は星空の下、夜のふけるのも忘れ祝宴を楽しみました。

翌日は、天気予報がハズレ、朝から晴天に恵まれ、よい登山日和となりました。小栗さんの奥さん手つくりの朝食をいただき、平山登山口へと向かう。私が始めて平山に行った時、掘削間もない出来立ての林道が木々に覆われ、登山口も広くなり、時の流れの速さを感じたしだいです。

山登り開始とともに現れるいろいろな植物、さすがボラレン、さしずめ歩く植物図鑑、誰かが知らない植物でも誰かが知っているといった具合に、わからない植物がないといった感じでした。第一雪渓で大休止、エゾコザクラ、アオノツガザクラ、エゾツガザクラ、ウコンウツギなどを見ながらしばしの休息、雪解け水がおいしい！しばしの涼を楽しんで登山開始、稜線まじかでナキウサギを発見、さすが大雪！稜線に出ると風が強く寒い、そそくさと平山の頂上を目指す。頂上に着き記念写真をそれぞれで撮り岐路に着く。霞んでいましたが、黒岳、北鎮岳、烏帽子岳、ニセイカウシュッペから延びる稜線沿いには、大槍、小槍、道標等のピークなどが見えました。このころから私の体調が悪くなりだし、比間良山へ向かうのを断念しました。また強風の為断念するメンバーと共に下山する事にしました。何人かは比間良山に向かいました。

金土と飲んだ事が災いして、脱水状態となり、皆さんの看病を受ける事となりました。幸い看病のおかげで大事にならず、無事自力下山することが出来ました。当日参加の会員の皆様ありがとうございました。紙面を借りてお礼申し上げます。

海を渡って来たベンチ

内山恭子

１０月１７日(日)は秋の森の観察会でした。色づき始めた木々を見たり、落ち葉を手元でじっくり観察したり、秋の陽射しを浴びて輝く草の実、鳥たちが喜びそうな木の実に足を止めながら歩きました。大沢園地に着いたのは１２時３０分過ぎていました。やっと昼食です。三々五々ベンチに腰を下ろした時、「このベンチはカメルーン産だよ。」「エッ～」、「本当？」おにぎり片手に仲間達が集まって来ました。ベンチには小さなプレートが貼ってありました。それによると樹種・オクナ科アゾベ、原産国・西アフリカ、カメルーン、製作者・オランダ カンベン市 ワイマ社。改めて見ますとドッシリとした重そうな材です。見るからに外国産という感じです。今まで気にもとめず座っていたベンチが遠くはるばる地球を半周してきたものだったとは。大沢園地には１０台置いてあります。 平成６年に寄贈されたとのことです。以下はインターネットで調べたものです。

アゾベ Azobe, エッキ Ekki, ボンゴシ Bongossi
(オクナ科 Lophira alata var.procera)

産地は西アフリカです。コートジボアールでは「アゾベ」、カメルーンでは「ボンゴシ」もしくは「エッキ」と呼ばれている。ヨーロッパなどでは、耐久性が高いことでよく知られていましたが、日本ではあまりよくは知られていませんでした。しかし最近になって耐久性が高いことが注目されて、輸入されるようになりました。現在では、ボンゴシという名前で取り扱われています。

特徴：乾燥すると非常に硬化し、耐磨耗性にすぐれる。腐朽菌に強く、マリンボーラーや白蟻にも食害されにくい。アスベストスレートに匹敵する難燃性を持つ。耐酸性に富むといわれている。

用途：重加工用材・重構造材・水中構造材・桟橋・水門・船舶・枕木など傷つきやすい場所に用いられている。

今年、花ウオッチングに行った南アフリカでケープタウンの Hout Bay（ハウト湾）から船でアザラシを見に行きました。その時ガイドの方の説明でハウトはオランダ語で木を意味し、植民地時代に森林であったこの地から木を切りだし、積み出されたことからこう呼ばれるようになったとのことです。どんなにか大量の木材がヨーロッパへ運ばれ、豊かな森が消えてしまったのだろうと思いました。現在でも西アフリカから各国へ木材が輸出されていることを考えると複雑な気持ちです。遠くからきたベンチがみんなに愛されるといいな～と思いました。

「秋のありがとう観察会」に参加して

岩見沢市　菊　池　富　雄

11月7日（日）野幌森林公園で行われた「秋のありがとう観察会」に妻と7歳の長男、4歳の長女を伴い岩見沢市から参加させていただきました。

参加のきっかけはテレビ放送のお知らせでこの行事を知り、この時期公園の遊具はシートをかぶっており、各地のイベントも一休みという季節で、子供たちはエネルギーを持て余し気味でしたのでちょっと森を散歩してこようかということになり参加をさせていただきました。

当日は「自然ふれあい交流館」に集合をして出発しましたが、われわれ家族4人にガイドの方が一人ついて下さりちょっと恐縮をしてしまいました。

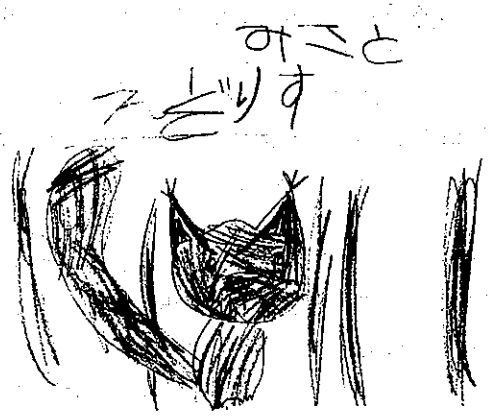
出発をしてから少し歩くと「えぞりす」が目の前に現れ子供たちは興奮気味でした。

落ち葉をカサカサと踏みながら森の中を観察して歩きましたが、ガイドさんからは、冬芽の話しや植物の見分け方、植物たちの仲間の増やし方の方法等たくさんの事をわかりやすく教えていただき大変勉強になりました。

この日はごみを拾いながらの観察会でしたが、ごみの収穫はそれほどなく公園を訪れる人はみんな自然を大切にしているんだなと感じました。

帰宅してから娘は「あのおじさんはどうしてあんなになんでも知っているの？どうしたらああいう風になれるの？」と不思議そうでした。

4歳の娘にはちょっとハードだったようですが、また機会を見つけて違う季節の公園を訪れて見たいと思います。



西岡水源池あれこれ

植松　茂

朝早く落葉の積み重なった水源池自然歩道を一歩一歩踏み締めて行くと見通しのよくなった雑木林にエゾリスが小枝から顔を出しヒヨドリ、カケスの姿がはっきりと見られるようになった。野鳥観察会のチャンス到来だ。

11月23日北海道ボランティア野鳥観察会がこの水源池で市民を集めて行われていた。何がなんだか分からないうちに主催者から「野鳥観察会の感想・評価」「水源池の様子」「観察会のからくち」等の題で原稿依頼があった。何を書いてもよいと頼まれ鉛筆を下ろしてみたが、何をどのように書いてみたらよいか思いつかない。

そんな訳でカラ類、キツツキ類、マガモの留鳥、昆虫類、小動物が一年中この池や森林に棲みついてどんな餌を食べどんな生態なのか今朝観察した「水源池の野鳥の様子」を書き記してもつまらない文章になる。

更にパンやヒマワリの種が置かれた給じ箱、給じ台、つりえさ場、脂身の入った網の箱に錠前が掛けられた様を野鳥の人為的な行動に今後どのような影響がでてくるのだろうか、と「関係諸団体へのからくち」を載せても何とかなるのだろうか。野鳥に未来はあるのだろうか。そのような事で追跡観察を続けていきたいものだ。

初冬の野鳥観察会に向けて、水源池の野鳥を見るために参加した市民たち。夏鳥は去り冬鳥の飛来が殆ど見かけず（数日前渡りの途中だろうかアカエリカイツブリを見かける）目立ったのは1年中西岡で観察することができる留鳥の仲間だ。

そのなかまが管理棟の前でアサガオの種やパンが載せられた給じ台、釘に刺さったリンゴの板の餌場で啄ばんではせっせせっせと近くの落葉した梢に運びまた啄んでいる。ここはなんと人口180万人大都市札幌の野鳥が棲みついている光景なのだ。知っている人は知っている穴場なのだろうか、それにしても自然豊かな西岡水源池に改めて感動したものだ。

更に落葉した広葉樹のジュウタンの上を踏み込みながら観察集団は奥へと進んで行く。そこには澄川からバスで乗り継ぎ豊かな自然の水源池へ毎日散歩に来るというかなり年配の4人組に出会った。恵庭岳の遠望がきく自然道を通り、湿地に囲まれた木道を歩き、いつも野鳥の美しい声が聞こえる森林歩道を一周するのが朝の仕事だ。水源池のこんなところが気に入っている。「夏場様々な昆虫、可憐な草花が見える」「水源池の空気がおいしい」極めつけは「大都市札幌にこんな自然がある」元気はつらつな4人組が笑って答えた。

そんな楽しい散歩で年配者がいつもおいしい空気を全身に浴びていたのだ。観察会で市民の健康づくりと生きがいについて改めて考えた。

小学生との観察会

－学校教育へのボランティア活動－

昨年に引き続いて江別市立第二小学校から、野幌森林公園での学習に本会への協力の依頼をうけました。学校教育への協力は大切な活動と考えガイドを引き受けることとしました。

江別市立第二小学校は野幌森林公園に近いこともあり、３学年の「総合的な学習」の自然環境学習のフィールドとして位置付けているとの話でした。

１０月１日（金）午前９時からおよそ２時間半を森林公園の大沢コースを使ってボランティア・レンジャーのメンバー７人で観察会を進めることとしました。３年生は３クラスのため各クラスを半分にして６グループとしました。

公園内は台風１８号の被害で、ようやくコースが使えるようにはなってはいましたが、倒木の凄まじさに、子どもたちは驚いていました。結果的に自然の脅威や森のしくみを学習してもらうよい教材になりました。また、めくれあがった粘土層が自分達の住んでいる野幌市街の地層とも関係があることなどを実際に確かめてもらいました。ともあれ、秋の気配が漂う穏やかな天気の中、子どもたちの素朴な疑問や質問に答え、ガイドしたボラレンメンバー自身も秋の森を楽しんだ一日でした。以下は子どもたちからの礼状です。

Ａ・Ｉ（女）

このまえ、森林公園をあんないしてくれてありがとうございました。いろいろなことをおしえてくれてました。とくに植物のことがよくわかりました。ほかにもおしえてくれて、とてもためになりました。ありがとうございました。

Ａ・Ｋ（女）

森林公園のせつめいありがとうございました。森林公園にまむし草というのがありました。その、まむし草が家にある図かんにのっていました。草、木、花のなまえがわかってためになりました。

A・I（女）

この前は、げんしりん公園で、植物をおしえてくれてありがとうございました。

でんでん虫の本当の名まえは「まいまい」だとか、あしながぐもは「ざとう虫」とかおしえてもらいました。

とてもたのしかったです。ありがとうございました。

H・N（女）

野幌げんしりんで、いろいろなことを教えてくれてありがとう。いろいろな植物をおしえてくれてありがとうございました。

ひなは、いろいろなことをいっぱい知りました。ありがとうございました。

R・K（男）

いろいろなことを教えてくれてありがとうございました。坂道でころんだ菊池遼です。ころんだ時、きずのてあてをしてくれてありがとうございます。

いろいろなことがわかりました。ありがとうございました。

Z・S（男）

森林公園のせつめいをありがとうございました。とても植物や大地などがわかりました。あとで、家でも勉強になりました。とても勉強にやくだちました。

ありがとうございました。

Y・U（男）

森林公園たんけんのせつめいありがとうございました。うるしの葉をさわるとかぶれるということをおしえてくれて、ありがとうございました。

これからうるしの葉をさわらにようにします。

冬の円山登山観察会

昨年に引き続き冬の登山観察会として、円山登山観察会を１月１６日（日）行いました。札幌の開拓に努力した、島判官は明治２年にこの円山に登り札幌の街並の構想をめぐらしたともいわれています。札幌に住んでいる人にとって、円山は小学生の頃から登山遠足等で親しんでいます。冬でも多くの人が登るので、雪が降った翌日でもすぐに、しっかりした踏み跡がつきます。当日は薄曇りの穏やかな天気で、会員を含め１３名の参加者が大師堂の登山口に集まりました。

この山は天然記念物に指定されているためか、大木があちこちに見受けられ登山口のカツラの巨木をまず観察です。雌株の樹上には昨年の秋結実した乾果が鈴生りです。その種子が野鳥の餌になっています。雪面に種子がたくさん落ちています。

昨年９月の台風で倒れた木も結構あり、台風のすさまじさを改めて実感しながら登っていきました。

木々の幹や枝の間から、南西の方角の山々が望めます。手稲山、三角山、百松山、神威岳、砥石山、ほんのチョット烏帽子岳も見えました。雪上にはエゾリスの足跡が確認できますが、エゾユキウサギの足跡は見当たりません。いろいろな木の冬芽を観察しながら頂上に着きます。チョットもやがかかった状態でしたが、札幌の町並みの彼方に夕張岳、樺戸連山、暑寒別連山を望むことができました。

休憩後、動物園横を経由するコースで下山です。台風で折れた大木のキタコブシの枝についている花芽がプックリと膨らんでいます。何か可哀相な気がします。

この下りコースも台風で倒された木々があちこちにみられました。予定していた１２時を少し回った時刻に全員スタート地点の大師堂前に到着です。冬の運動不足を解消するちょうどいい円山登山観察会でした。

観察できた動植物

樹木　カツラ、ハリギリ、シウリザクラ、アオダモ、ウリノキ、キタコブシ、ハクウンボク、オニグルミ、シナノキ、ヤチダモ、ホオノキ等

野鳥　ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ハギマシコ、ウソ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラの声、ヒヨドリ等

足跡　エゾリス、アカネズミ、キタキツネ、ハシブトガラス等

「知床半島」なるか世界遺産

札幌東区　　伊藤秀平

北海道の東「知床半島」、夏のほんのひと時高山植物が咲き乱れ、足早に行き去る秋が半島を彩ります。今年、知床半島が「人類共有の財産」として世界遺産の候補地になり、その問題で揺れています。

ユネスコ諮問機関、IUCN 国際自然保護連合のデビット・シェパード氏が平成 16 年７月現地調査に訪れました。

そして「知床には動植物の多様性を保つ豊かな環境があり、絶滅の危機にある鳥類がいて、羆の生息密度が驚くほど高い」と高く評価しました。

北海道だけに生息する羆は、知床に約５００頭いるといわれています。本州の「つきのわ熊」より一回り大きく、４００Kgもありますが、元来臆病で平和的な性格と言われています。

雑食性で野草、木の実、蟻など食べて生活していますが、山中にいた羆も１５年前に絶滅を目指す計画から共存を目指す計画に変更され、国立公園の中ではほとんど駆除される事が無く、観光名所にも姿を見せ人前に出てくるようになりました。

そして、最近人を恐れない新世代熊といわれる羆も出るようになっています。

現在、知床には年間２３０万人の観光客が訪れています、世界遺産に指定されると世界中からさらに多くの人々が集まってきます。

その受け入れの問題、動植物の保護の問題など、地元の基幹産業までも巻き込んだ、いろいろの問題が関係者を悩ませています。

共存を目指す野生生物では羆が一番大きなことですが、人間のマナー違反として、食べ残しの放置や動物への餌やり、また鮭や鱒の遡上する頃に、釣った魚の腹を割いて卵だけ取って死がいを捨てていくため、悪臭を放ち羆を引き寄せる、そうした羆と人を近ずける行為が後を絶ちません。

観光客に財団スタッフが注意を呼びかけているにもかかわらず、熊を見ると歓声を上げて騒ぎ立て羆を興奮させ危険な状態にするなどの問題があります。

増える観光客に対しわずかなスタッフですべての安全を確保し、満足させるのが大変難しいのが現状のようです。

羆と共存するための問題はいろいろ研究されていますが、長い年月を要する難しい仕事です。

理想的な例として、知床の突端に近い番屋で夏の間１０人ほどの漁師が暮らしているが、近くに羆が出ても何も問題が起きていません。　かつては羆が出ると猟師を頼んでいたそうですが長い時間をかけて、周辺には餌になるものを置かない、互いに無視しあうというルールを守っているという事実です。

指定されて観光客が増えても対応できる、エコツーリズムに対する戦略を早急に開発する事を求められました。

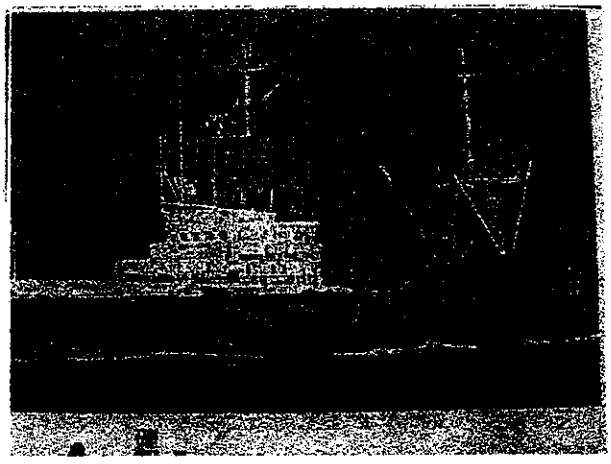
他に、「トドの餌不足にならないようにスケソウ鱈を保護せよ」との指示もありました。

北海道の基幹産業である漁業は、死活問題だけに厳しい注文です。羅臼漁協では、幼魚がかからないように網に工夫したり、産卵期は一部禁漁にして資源保護に努めており「スケソウ鱈は知床の主要種のトドの餌」としてさらなる規制を要求されても無理だといっている。

道と環境庁は、国際自然保護連合に対し「新たな規制はしない、将来的には保護強化も検討する」と苦しい回答をしました。

スケソウは羅臼漁協だけの問題ではない、今年もロシアのトロール船が国後島沿岸（ロシア主張領海内）でスケソウ漁の操業を始めました。

羅臼漁協ではスケソウ漁の船は19ｔ級が主流だがロシアのトロール船は741ｔで、4000ｔ級の大型船も来るといい「根こそぎ漁」にいらいらし「資源枯渇の最大の原因はロシア船団のトロール漁なのに……」と割り切れない思いをしている。



自然の世界はつながっていて、スケソウ鱈の保護は羅臼漁協だけで出来る問題ではない。

白神山地、屋久島につぎ、我が国の三番目となる自然の世界遺産候補の知床ですが、現代の人間社会と生活環境の中での、エコツーリズムの難しさを改めて考えさせられます。

平成１７年７月には知床半島の世界遺産登録の審判が下されるが、納得できる回答が得られるかどうか難しい問題である。

偽高山帯形成の山「月山」

東北地方山形県中央に位置する月山は、標高（１，９８４ｍ）今を去ること３５万年前に噴火活動が始まり湯殿山火山、姥ケ岳火山、御浜火山と月山中央火山等の活動を経て、長い時間をかけて現在の山容となった成層火山で、その名に相応しく半月形をした大きな山です。

花こう岩や新第三系からなる基盤山地の上に、輝石安山岩質の溶岩と火山砕屑物がのって、これ等の作る火山斜面が、月山特有のなだらかな山容を形成する。月山の南西にそびえる姥ケ岳と湯殿山は、月山の山腹に出現した側火山である。

月山は、花の山と共に修験道信仰の山でもあり、夏季には登山者より白装束姿の信者の方が目立つ道場といった処．．．．

羽黒修験道の歴史も古く開祖と言われている能除仙は、崇峻天皇の第三皇子とされ、聖徳太子の従兄弟とされる人物で、「蜂子皇子」とか

父である崇峻天皇が蘇我馬子に暗殺され、その為、流浪の行脚の果に、羽黒山に入ったという。

実際、境内に宮内庁の表示のある「蜂子皇子」の廟所もありました。

これが、皇族の墓が東北地方に存在する唯一のものとされてます。

修験道の開祖といえば、役の行者小角の名も見え隠れの歴史とロマン．．．

羽黒山には、４２２４段の階段のコースに国宝の五重ノ塔が杉の大木の中にあり、ツルアジサイを幹にまとい、その周辺の物音一つしないうす暗い林の中で、ミヤマヨメナの花たちは回りを薄紫色に染めながらそっと咲き、しかし、この隔離された空間の静けさをかき乱す者は、誰でも許さないかの様な威厳さえ感じされる。（皇族の影のせいか．．．）

ミヤマヨメナの話、「承久の乱」に敗れ佐度ケ島に流された順徳天皇の毎日は淋しく悲しいものであり、そんなある日、庭の片隅にひっそりと、薄紫色の野菊が咲いているのに気が付き、天皇は、この花を見ていると都の生活を忘れられ心が慰められる、とこよなく愛された。

それ以来、佐渡の島人達はこの花を「都忘れ」とお様になったそうな。

この、ミヤマヨメナはミヤコワスレの原種といわれ、ヨメナ《嫁菜》は優しそうで美しいから、恐い嫁さんの場合何んと呼ぶべきか、想うと．．

羽黒山口コースには、手向の宿坊があり、一般の人も利用できる。
十数軒の宿坊も流派がある様だが、最近はあまりこだわりがない様です。
宿坊のオーナーは、神主であり峰入修業の先達でもあり、宿泊者は大きな祭壇の前で食事をとり、寝具、入浴もセルフ、朝の勤業ついては自由（一般宿泊者）であった。
ここ手向からは、月山八合目まで鶴岡始発のバスがあり、ここかわ一時間３０分で、レストハウスもある標高１，４００ｍ、弥陀ケ原湿原である。

涼しさやほの三ケ月の羽黒山　　雲の峰幾つ崩れて月の山

かって松尾芭蕉はこのコースを鶴岡から歩いて来たのです。
月山の山頂経由で湯殿山についた芭蕉は一句

語られぬ湯殿にぬらすたもとかな

弥陀ケ原湿原は、偽高山帯である。　偽高山帯の成因について学説の興亡があった。１９８２年　梶氏の説は偽高山帯の分布が詳細に説明された為多数の支持を受け、日本林学会賞も受けた。私もその説を記憶していました。１９９０年杉山氏の説を立てました。
氷河時代は乾燥した気候の下で、トウヒやヒメバラモミ等といったトウヒ属の樹木が繁栄していた。然し此等の樹木は後氷期の多雪化によって衰退し、その結果、亜高山帯の針葉樹林は雪の少ない太平洋側を除いていったんほぼ滅亡してしまい、その後、４０００年程前に至って亜高山針葉樹林はシラビソ等モミ属の樹木を中心に復活、然し多雪山地ではこれがなかなか上手にゆかず、多雪化した気候に適応したオオシラビソが拡大した山地でのみ亜高山針葉樹林が成立した。然しオオシラビソが拡大できなかった所は針葉樹林が欠如したままで残り、その場所が偽高山帯になるという。
この説は、偽高山帯の成立過程を解きあかす上で、現時点では最も優れた説とみなされています。
弥陀ケ原湿原から始まる月山、鳥海山、飯豊山、朝日岳こそが偽高山帯なのです。これから先で偽高山帯の特徴が多数確認されます。
頂上に向って左（東方向）には、御浜湿原経由で、立谷川登山口に行けます。

弥陀ケ原湿原には、一周する木歩道があり池塘群と共に多くの高層湿原植物物の競演、トキソウ、モウセンゴケ、キンコウカ、両棲類サンショウウオ？の水中ウォーキングと何んでもありの感じ．．．

弥陀ケ原を後に頂上へと割合緩かな登りで、ミヤマナラ、ヤハズハンノキ、ミネカエデ等が多い。踏跡が横方向にありその先には小さな墓碑、仏像が俸られ花や水もある。中にかろうじて判読可能な文字安政、寛〇〇、．．．．

短い急登の先は、中間点仏生池で、仏生池小屋があり発電機の騒音が下世界を思い出させて下れる。コーラ、ジュース、お茶、氷水何んでもありそう。自販機でペットボトル￥５００．－トイレ山小屋入館料￥５００．－支払うと使用できるそう。

後で気付いたが、頂上小屋、鍛治小屋とどの小屋周辺に、ウゴアザミが生育していて、小屋の食用品のよう。ウゴアザミは青森、岩手、秋田、山形地方にあるアザミで八幡平、秋田駒ケ岳、田沢湖周辺でも見られます。

これからの上部で、名物の越年する残雪の広がりを何か所も見れます。

残雪はできる場所によって、三種類に分類されます。

1．稜線の風下側に細長く続く「横長型」の残雪で、雪庇の雪が解け残ってでたもの、飯豊山の主稜線は比較的なだらかなのでこの型の残雪

2．浅い谷の谷頭部にできる「丸型」の残雪で冬の雪の吹き溜りが元になっている。この二つの型の残雪を「雪田」と呼ぶ事もあります。

3．風下側の谷に沿ってできる「縦長型」残雪で、この型は主に雪崩の雪が溜まったもので、通常「雪渓」と呼ぶものだそう。

雪渓は大規模なものが多く、飯豊山の石転び雪渓、北アルプスの白馬の大雪渓と有名なものがあります。

残雪は植生や地形に様々な影響を与えている。飯豊山の温身平周辺偽高山下部でねじ曲ってのたうつ様な形になったブナ、ミヤマナラの低木が見ます。

仏生池の上の坂は通称行者返しと呼ばれ、その昔役の行者小角が転倒した為に引き返した坂といわれています。

頂上直下のこの砂れき地帯には残雪があり、雪の消えた場所はお花畑けとなり、雪解けの遅い所はコケしか生育できない雪窪となっていた。
この度の山行の目的の一つは、この雪窪（残雪砂レキ地）と呼ばれている裸地と、下山コースの頂上下の昔より「大雪城」という大雪渓で、大正６年に大関博士が雪氷調査を論文に著した学問的にも由緒のある大雪渓です。
先の雪窪の周囲には、厚さ２０～３０cm程の赤茶色の土があり、その外周に厚さ７０cm程度の黒い土？（泥）が堆積し、雪窪、雪渓周囲に同心円状に分布しているのが見われます。　残雪砂れき地には土はありません。
７０cm程度の黒い土には、三層の火山灰が挟っている。　場所により挟っていない所もありますが．．．
一番下は、約７３００年前に遠くは、屋久島と硫黄島の間より飛んできた鬼界アカホヤ火山灰で、これは北アルプスの薬師岳カール、尾瀬ケ原、巻機山、屋久島の縄文杉の根周りにもあるそうです。
その上は６３００年前の、一番上は１１００年前に十和田カルデラ（火山）より飛んできたもの、十和田湖は二重カルデラで国の天然記念物であり二層の火山灰により、二重カルデラ、二回噴火した事が立証されます。
以上により、最終氷期が終る約１１，０００年前、気温の上昇で月山のおおっていた氷河や万年雪が融け、植物は山に広がり、枯葉が溜り土ができまた７０００年から４５００年前にも気候が冷涼して雪融けが遅れ、今より残雪砂れき地が広り、それ後温暖化し、再び植物が侵入し土ができたと考えられている様です。
こうして一万年もかけてようやく７０cm程度に育まれた月山の登山道の土が、登山者の増加により乱暴な歩き方と共にどんどん失われています。
月山の土は、一万年という気の遠くなる歳月をかせた自然自然てす。
これを人は一瞬の間で消し去うとしています。
頂上付近では、クロユリとキバナノコマノツメの群落がありました。
黒と黄色は人の目を引き付ける組合せの色で、私の仕事場のロープもこの組合せ、クロユリは黒ではないが濃紫、キバナノコマノツメは鮮やかな黄色。例え咲いていたとしてもバラバラでに離れていたらこんなにも目立つ

存在ではないに違いない。
もしクロユリとキバナノコマノツメがこの事を意識して寄り添って咲いているとのだとしたのなら、相当の策士だと思う。
キバナノコマノツメはスミレ類の中で唯一スミレの名称がないスミレです。
頂上には、月山神社があり、月読の命が俸られていて農業の神様である。
頂上からは、大雪城が下に見られ、頂上小屋もあります。
すぐ下には、鍛治小屋もありこから左手の下山路は、志津方面と岩根沢口
今回は湯殿山に下山、岩塊の急傾斜の脇にも無気味な色のクロクモソウの大きさにビックリ、雪渓の上をスキーをしているのを眺つつ湯殿山温泉に、今日のコーラは美味だろうなぜなら一本５００円も支払わくてもいいのだから．．．．．
この文の詳細の確認は下記によりました。

小泉武栄、清水長正共編	山の自然学入門	古今書院
小泉武栄　著	山の自然学	山と渓谷
守屋以智雄　著	火山を読む	岩波書店
久保田展弘　著	山岳霊場巡礼	新潮選書
久保田展弘　著	修験道実践宗教の世界	新潮選書

ブナの原生林が息づく白神山地を訪ねて

佐藤　清一

ブナの北限といわれる黒松内の歌才ブナ林、その初夏の生命の輝きを見てとても好きになった。そこで、ブナの原生林に覆われた白神山地を訪ねてみたいと思っていた。今年７月上旬、津軽平野に屹立する秀麗な岩木山に登り、風光明媚な十二湖を歩いてみた。岩木山は、岳コースから登り標高６００～７００m位のところに夏の薫りを漂わすブナの巨木が見られ、高度とともに幹の太い大きいものからその細い小さいものへと、いわば等比数列を表現しているようでもあった。

十二湖へは、森と湖のたたずまいの全景を見たいと思い、その駅から八景の池、王池などを通ってブナの原生林地域、青池、そして鶏頭場の池などの周囲を歩いてみた。この純林に覆われた地域では、樹齢百年以上の木々が林立し、初夏の若葉に光が降りそそぎ生命感に満ちあふれていたし、葉のつけ根には雄花がたくさん咲いていた。林床には小さな稚樹も多く見られた。

ブナの種子は、トチの実などのようにタンニン、サポニンなど灰汁が含まれていないので、ネズミなど小動物にとってもおいしい食物で大半は食べられてしまう。そのなかで僅かに生き残った種子が発芽し若葉をつけて成長するといわれる。そうした厳しい環境を知っているのか、６～７年単位に大量の種子を散布して小さい動物が食べても食べきれない状況をつくって種子を保存するといわれている。とても寛大ですばらしい生き残り戦略を身につけていると思う。

十二湖のシンボルともなっている美しい青池、その群青色の池に陽光がさしこみ樹木の姿がとても陰影に富んでいた。ここを管理する岩崎村のパンフレットには永遠の青などという洒落た表現もいいと思ったが、私たちの持っている言語ではうまく表現しきれない深みのある青さであった。

その後、鶏頭場の池を通り十二湖庵で名水から沸かしたおいしいお茶を飲みサンタランドに向かった。ここでは北欧の文化を紹介したり、自然観察・学習の場となっているが、他面ではかなり観光化されてもいる。この貴重な山麓を大きく切り開いて観光などの目的のために乱開発をしたと思われる。規模をもっともっと小さくして貴重な世界遺産を残してほしかった。それでなくとも伐採に伐採がくりかえされて原始の森は縮少を余儀なくされてきた。

この山地は、原始の自然を残すために許可なく入山することができない核心地域をつくり、青池周囲は交通規制をしたりして保存のための配慮もされていた。

この旅の前、「朝日新聞」（６月１２日、土曜日版）に掲載された特集「気候変

動と森林」で、大きなタイトルがつけられた「白神に危険信号」という記事を読んでいた。このまま温暖化が続くと９０～１００年後には気温が３、６度も上昇し西日本のブナは全滅し、白神でも０，１～１０％位と予想され、ブナは逃げ場を失ってしまうと書かれていた。このことがとても気になっていた。

豊かに水を貯え森を育てる母なる木ともいうべきブナ林、今日では環境保全林といってもいい、それをいかに保護していくのか、という大きな課題が背負わされていることを感じた白神への旅でもあった。

◎◎　原稿募集　◎◎

会員のみなさまに原稿をお願いしたい。

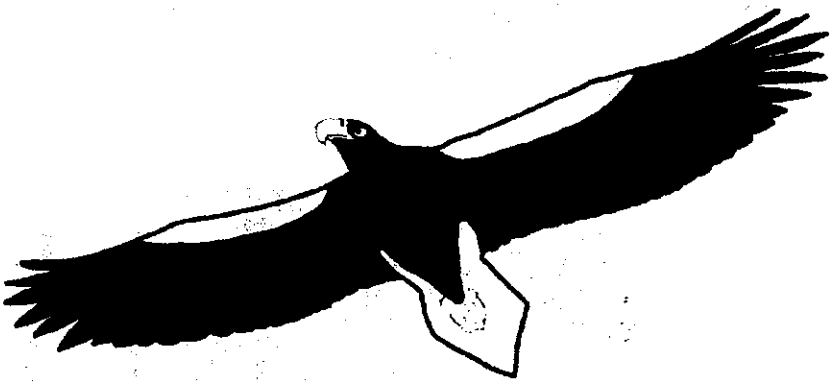
内容　－　自然との出会い、想い、観察会、登山、支部活動など自然に関することなど。

形式　－　この機関誌で１～２ページ程度。出来ればパソコン、ワープロなどで。手書の原稿のままでもいいです。

締切り期日　－　３月１５日（火）までに。　北広島の佐藤清一まで。

オ オ ワ シ (Haliaeetus pelagicus)

「世界で最も優美なワシ」「半数近く北海道に越冬」　荻野 裕子



オオワシ　イラスト (財) 日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ
川崎 慎二 チーフレンジャー

今回は世界で最も優美なワシ、そして世界で個体数が推定約５０００羽の絶滅危惧種でもあり国の天然記念物のオオワシをご紹介させて頂きます。

オオワシは北海道の冬の風物詩的野鳥で、よく流氷観光ポスターに載っている写真を皆さんも一度は目にされていることでしょう。

全長は８８cm位から１０２ｃｍ位で翼を広げると２２０～２５０ｃｍにもなる日本で一番大きなワシです。

成鳥のオオワシは雄雌同じ色で体と翼の上面は艶のある黒褐色、中央の長いクサビ型の尾、翼の前側の縁、足の脛と額は白い色です。また嘴は大きく、湾曲して鮮やかな橙黄色で足も大きく黄色です。

飛んでいるオオワシは優美ですが、樹木や氷の上に止まっている時の顔を観察してみると案外ひょうきんな目をしていて、大きな黄色い嘴がまるでマスクを被っているように見え思わず微笑んでしまいます。

オオワシは主にロシア極東のアムール川下流域、オホーツク海沿岸やカムチャッカやサハリン北部で繁殖し一部が越冬に北海道、東北地方などに渡って来ます。繁殖地域が限られたオオワシは個体数が世界で推定約５０００羽、何とそのうち２０００羽ほどが北海道へ越冬に来ているのです。

北海道での越冬数２０００羽は全世界の総個体数の約半数近くと言う驚くべき数なのです。

外国のバードウォッチャーが北海道にオオワシを見に来るのも頷けます。

世界で推定約５０００羽の元々繁殖力も弱いオオワシは繁殖地の環境の悪化、そして越冬地である北海道でも人為的原因で減少の危機に瀕しています。

オオワシは繁殖地では哺乳類の死体、カモ類も食べますが主に魚類、特にシロサケを獲物とし、冬はホッチャレの死体を食べて過ごしています。

サケの溯上河川の少ない北海道で越冬するオオワシは、漁の網からこぼれ落ちるスケソウダラや小魚を獲物とする人為的餌に頼っていました。しかし最近はスケソウダラ、コマイなどの漁獲量が減り、オオワシはハンターに撃たれたエゾシカの死体を餌に求め山間部に移動するようになりました。被弾したエゾシカ死体の使用禁止の鉛製弾丸も飲み込み鉛中毒で死ぬオオワシが今増えているのです。また交通事故や電線に感電して死ぬオオワシも増えてきました。

世界の半数近くが越冬する北海道でのオオワシの人為的減少が止まる対策を望みます。

このお正月、晴天の知床フレペの滝展望台から眼下を望むオホーツク海の上を１羽のオオワシが黒褐色と白のコントラストの翼も鮮やかに悠然と飛んでいる姿は息を呑むほどの美しさで、しばし我を忘れ見入っていました。

これから本格的な流氷の訪れと共に北海道各地で、皆さんは世界の最も優美であるオオワシが飛んでいる姿を目にすることが出来るでしょう。北海道で、そして世界でオオワシが絶滅する事のないことを祈ります。

参考文献　図鑑日本のワシタカ類　文一総合出版　　日本動物大百科鳥類Ⅰ　平凡社

フィールドガイド日本の野鳥（財）日本野鳥の会　鳥６３０図鑑（財）日本鳥類保護連盟

自分勝手な考え　review　書評

恣意的ブックレビュー

今年の冬は、地域的に楽してます。なぜかわが当別町にあまり雪が降らないのです。この原稿を書いている今日を含めて５日ほど雪かきをしていません。これも地球温暖化の影響なのでしょうか。冬はフィールドに出る機会が限られますから、色々な知識を深める時間がたくさんあります。今回は知識や観察会ネタを仕入れるための図鑑を紹介します。

野草の名前　春、夏、秋・冬

和名の由来と見分け方　山渓名前図鑑

高橋勝雄　著

山と渓谷社　各2，730円

春　2002年3月

夏　2003年3月

秋・冬　2003年10月

ISBN4－635－07014－X（春）

ISBN4－635－07015－8（夏）

ISBN4－635－07016－6（秋・冬）

副題が示すように、植物の名前の由来と見分け方のポイントをイラストと写真を使い解説している図鑑です。名前の由来は諸説入り乱れたり、適当だったりで、疑問符つきが多いのですが、この図鑑の由来は結構納得してしまいます。

3冊まとめて本屋で買うと8,000円を超えてしまうのがネックです。ただ、図鑑としても十分使用に耐えるので、高すぎるとは感じないでしょう。自宅にパソコンがあり、インターネットを使える環境にあるなら、ネットショッピングでユーズドブック（古本）を購入されるのがベストです。ほぼ新品同様のものが3冊で5,000円程度です。これから紹介しようと思っている本のなかには、かなり古いものがありますので、そのときにはネットショッピングの利用が便利です。

時間が経っても良い本を紹介するはずだったのですが、すぐに入手困難になりそうな本がありましたので、あえて紹介します。

昨年の台風18号が北海道にもたらした被害は、まだ皆さんの記憶に新しいところだと思います。北海道大学構内も相当の被害を受け、中でもポプラ並木の惨状は目を覆いたくなるものがあります。また植物園も甚大な被害を受けたようで、柵の外から眺めただけですが、かなり見通しが良くなっていました。日本で２本しかないといわれているシロマツがボッキリ折れた写真があります。サクラ並木のそばのヒッコリーは根こそぎ倒されました。この被害状況を写真集としてまとめたものが出版されました。内容がどうのこうのではなく、自然が人間にもたらした警鐘の記録として一見の価値があります。それほど高価なものではないので、手に入れることをお勧めします。ちなみに、収益の一部は北大構内のポプラ並木と緑の再生のため寄付されるそうです。

烈風一過　北大キャンパスの樹々

北海道大学総合博物館　編
北海道大学図書刊行会　５００円
２００４年１２月
ＩＳＢＮ４－８３２９－０３２７－６

それから、前回紹介した雑草ノオトの続編が出ていましたので、これもお知らせします。６０種の身近な植物を解説しています。

柳宗民の雑草ノオト②　柳宗民　著　三品隆司　画

毎日新聞社　1,890円　２００４年3月　ISBN4－620－31673－3

（副会長　五十嵐　一夫）

ボ ラ レ ン 情 報

《２～３月の観察会》

◆藻岩山登山観察会　２月６日（日）10:00~14:30

集合場所　慈恵会登山口　弁当持参（踏み跡しっかりしていて歩きやすい）

◆天神浄水場～天狗山東斜面（小樽支部主催）２月１９日（土）9:30集合

集合場所　天神浄水場広場（カンジキが必要です。弁当持参）

◆冬の森の観察会　２月２０日（日）10:00~12:30

集合場所　野幌森林公園ふれい交流館

◆野幌の春をさがそう　３月６日（日）10:00~12:30

集合場所　野幌森林公園ふれい交流館

◆塩谷丸山登山（小樽支部主催）　３月２７日（日）8:30集合

集合場所　ＪＲ塩谷駅駐車場（カンジキが必要です。弁当持参）

（小樽支部主催の行事については北原宅℡ 0134-27-1701 へ問合せ下さい）

《研修会》

◆テーマ「冬に生きる虫たち」　３月６日（日）１３：００～

講師　研修部長　小林　英世　氏

場所　野幌森林公園ふれい交流館

（午前中の観察会終了後、１年間の観察会反省も含め実施します。多くの会員の参加を期待しています）

《資料の寄贈》

今年度は次の資料や冊子の寄贈を受けました。閲覧希望の方は事務局（田村）まで（℡ 011-791-0127 ）

◆街の木から川へ山へ（富良野の木と森）　南部　栄一氏（会員）より寄贈

◆十勝野の花たち　小野寺　実氏（会員）より寄贈

◆鵡川河口へ（チュウシャクシギ君の旅）　門村　徳男氏（会員）より寄贈

平成１７年度の観察会

４月からの観察会・研修会の予定を立案中です。会員の皆さんの中で、観察会を実施運営を考えていましたら、ご連絡ください。研修部、事務局がお手伝いします。また、こんな観察会を企画してほしい等のお考えをお持ちの方、是非お知らせ下さい。

連絡先　研修部（小林　℡ 0123-36-3944 ）事務局（田村　℡ 011-791-0127 ）

編　集　後　記

・　表紙は、深まゆく秋の野幌森林公園を、会員の熊野美子さんに風情豊かに描いてもらいました。

・　今回の観察会に参加された岩見沢市の菊池さん、札幌市の植松さんからすてきな原稿を送っていただきました。とても感謝しています。

・　観察会などに行くとあまり見たことのない植物にあったりするが、会員の誰かが必ずその名前から特徴まで説明してくれる、アマを超えた専門家がいます。とても心強く感じています。会員のなかには野山の植物ばかりでなく、高山植物、キノコ、鳥、昆虫などについてプロ級の力を持った人たちがいます。それらの知識を集めて総合すればわがボラ・レンは相当な力量を発揮できると思います。そうした知的財産とうべきものを「エゾマツ」などを通して内外に発信していきたいものです。
みなさんの原稿を待っています。

・　スマトラ沖地震・インド洋の津波は死者・不明者約２９万人を出すとても悲しい出来事でした。自然の剥き出しの暴力はほんとうに恐ろしい。海抜３０ｃｍで温暖化が心配される「モルディブ」では浅いサンゴ礁が深い海に続き、波消ブロックもあって被害を小さくしたといわれています。それに対して、タイのプーケット島の西側では大量のヤシの樹が伐採されて観光地化されて被害を大きくしたそうです。
それにしても地球は病んでいるのかもしれない。(S)

≪　エゾマツ発行　≫
２００５年１月27日発行
代表　　川端功治